

妻

大

平成二十一年度

中学校入学試験問題 国語 第一回（二月一日実施）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

- 一、問題は20ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の1～12の問いに答えなさい。

時間の速さの感覚は、そのときに置かれている心理状態によって違います。早く経<sup>た</sup>つて欲しいとき、恐<sup>ろ</sup>ろしいと思<sup>っ</sup>ているときは、時間がゆっくりにしか進みません。つまらない話を聞かされているときや、後<sup>①</sup>もう少しで勝<sup>て</sup>るスポーツ試合のロスタイムなどでも、時間の進みが遅<sup>おそ</sup>く感じられます。逆に気持ちが穏<sup>おだ</sup>やかで、夢中<sup>③</sup>になって楽しんでいるときは、時間が早く経<sup>つ</sup>てしまいます。夢中になって遊んでいる時間や、よい映画を見ているときなどは、「もうこんなに時間が経<sup>つ</sup>たのか」と、おどろいた経験<sup>④</sup>が多くの人にあるでしょう。楽しい時間が早く過ぎてしまうように感じるのは、残念なことです。しかし、病<sup>二</sup>気のときは時間が遅<sup>おそ</sup>くなりますし、意欲に満ちているときほど時間が速<sup>おそ</sup>く感じられます。受<sup>ホ</sup>験勉強<sup>ホ</sup>をしているときなど、時間が無いと嘆<sup>なげ</sup>いたことは誰<sup>だれ</sup>でも経験<sup>④</sup>したことです。時間が長いと感じるのもつらい経験<sup>④</sup>に違いありません。

⑤ 一日は誰にとっても二四時間で、日によつて長い一日もあれば、短い一日もあると感じるのは錯<sup>さつ</sup>覚<sup>かく</sup>なのだ」というのが現代人の考え方ですが、それは本当でしょうか？ 私たちが生きている時間は、毎日の生活の中で、呼吸<sup>⑤</sup>し、働<sup>はたら</sup>き、喜<sup>よろこ</sup>び、嘆<sup>なげ</sup>き、苦しんでいる時間です。その時間は、一日二四時間の時計の時間だと考えるよりも、生活の仕方によつて速<sup>はや</sup>くなったり、遅<sup>おそ</sup>くなったりするものだと考えて暮<sup>く</sup>らしてみたらどうでしょうか？ こう考えると、気持ちが穏<sup>おだ</sup>やかになり、時間が追<sup>お</sup>いかけてくるような感覚<sup>⑥</sup>を払<sup>はら</sup>いのけることができ<sup>⑥</sup>るかもしれません。時間の感覚として、時計の時間だけが真<sup>ま</sup>実<sup>じつ</sup>だと考える必要<sup>⑥</sup>はないのでしょうか？

実用性は時計の時間がありますが、ニュートンが物理的時間を発見する一七世紀まで、あるいは日本では江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>時代が終<sup>お</sup>わるまでは、人々はそうした

1

時間の上で生きていたのです。

⑥ 歳をとると一年がすぐに経<sup>へ</sup>つてしまつて、時間の進み方が速<sup>はや</sup>くなるように感じられます。これは九〇%以上の現代人に共通する感覚

ですし、同時に西洋東洋を問わず、昔の人の書いたものにも見られます。これは、年齢の作用であり、中年に差しかかる人の誰もがらす嘆息です。たしかに子供の頃は、時間がいっぱいありました。それがいつの間にか、あつという間に一年が過ぎてゆくようになり、<sup>⑧</sup>とくにこの一〇年の時間は、自分でも驚くほどの速さで過ぎてしまいました。

いちばん簡単なこの説明は、たとえば一年の長さを、自分の生きてきた人生全体に対する **2** で説明するものです。一年は、一〇歳の子供にとっては、自分の人生の一〇分の一だけれど、六〇歳の人にとっては、人生の六〇分の一に過ぎません。ですから、六〇歳の人の一年は短いのだといいます。

もう少し生理学的な説明は、歳をとると運動能力が衰えるからだというのがあります。若い頃には一〇分でできたことが、歳をとると二〇分かかるとすれば、一〇分ぶんの時間が二〇分かかったことになります。すなわち、できた仕事の量から考えると、時間が倍早く経ってしまったように感じるようになります。

<sup>⑨</sup>時間に対する視野が、子供の頃と歳をとってからでは違うからだという説もあります。小学生の頃は、昨日の宿題のことや、来週の日曜日に家族で出かけるハイキングのことぐらいしか考えていませんでした。ところが大人になると、一年先の会社の業績について計画通りに進んでいるかを考え、もし転職したら家族を養えるかなどといったことが頭をよぎり、退職するといよいよ死ぬまでの時間がどれだけ残っているのかが気になってきます。目の前のことしか頭にない子供の時間はゆっくりで、数年の計画を視野に入れて生きている大人の時間は速く感じられます。子供は時間を日や月で数え、大人は時間を一年や一〇年で数えるといってもよいでしょう。

心理学で使われる短時間の時間評価も、歳をとると長くなることが確かめられています。他に気を引かれるようなことがない静かな環境で、三分が経過したと思ったときにキーを押してもらおう実験をします。すると、小学生や中学生は、三分より前に三分たったと思うのに対して、六〇歳、七〇歳の方は、三分より二〇秒も長く経ってからそれを三分だと思っていることがわかりました。個人差や、

同じ個人でもその時の精神状態で、この時間評価の値はプラスマイナス五〇%も変動するのですが、大勢の人の平均をとると、たしかに時間評価は遅くなっているようです。そうすると、歳をとって時間が **3** 感じられるのは、ヒトが感じている時間が **4** になったからだといえるでしょう。自分がまだそんなに時間は経っていないと思っっているのに、時計の時間からもうその時間が過ぎたと教えられるので、時間が速いと感じるのです。時間が **5** なるのではなくて、本当は自分の心理的時間の進む速度が **6** なったのだということです。

脳の記憶機能に基づいた説明もあります。新しい事柄は、脳<sup>かいば</sup>の海馬<sup>かいば</sup>というところで振り分けられて、記憶としてそれぞれの場所に蓄えられます。この記憶振り分けの回数が、時間の長さになるという説明です。歳をとると、現実<sup>じやうじつ</sup>に遭遇する経験はすでに脳に蓄えられた記憶に残っていることが多くなってくるので、新たに海馬を経由して脳の記憶領域に振り分けられるべき事は少なくなってきました。ですから、回数が減り時間が短く感じられるようになると、この海馬説は説明します。

その証拠に、歳をとっても、たとえば、知らないところを旅行したり、新しいことを学んだりしているときは、時間が長くなったような気がする経験は、誰も持っているではありませんか？ <sup>⑩</sup>海馬の記憶振り分け回数説は、それをうまく説明します。

しかし、時間の感覚は、多くの要因の複合によって決まっているので、どれか一つを選び出すことはなかなか難しいことです。たとえば、その場で感じる時間の長さ、過ぎた後で思い出として感じる時間の長さは異なることがあります。私たちの感じる時間は複雑なものなのです。その複雑さを楽しめるような生活をしたいものです。

問1 — 線①「少して」、②「穏やかで」、③「楽しんで」の「で」と同じ働きのものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ 隅田川すみだがわを泳いで渡る。      ロ 雪が降ったので寒い。      ハ 日本人は豊かである。  
ニ これは彼かれの本でした。      ホ 学校には電車で行く。

問2 — 線④「時間が長いと感じる」とあるが、——線部イ〜ホのうち「時間が長いと感じる」場合をすべて選んで記号で答えなさい。

問3 — 線⑤「一日は誰にとっても二四時間で、日によって長い一日もあれば、短い一日もあると感じるのは錯覚なのだ」と現代人が考えるのはなぜか。「〜から」に続くように、文章中から十五字以内の部分を選び出して答えなさい。

問4 1 に当てはまる適当な言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 西洋とは違う      ロ 実用性に満ちた      ハ 年齢によって変わる      ニ 生活の中で感じられる

問5 — 線⑥「歳をとると一年がすぐに経ってしまつて、時間の進み方が速くなるように感じられます」とあるが、その原因を説明する考え方を筆者はいくつかあげている。その数を漢数字で答えなさい。

問6 — 線⑦「西洋東洋を問わず」の意味を変えずに次の文のように書きかえる場合、【 】に当てはまる言葉をそれぞれ漢字で答えなさい。

・ 【 】の【 】を問わず

問7 — 線⑧「とくにこの一〇年の時間は、自分でも驚くほどの速さで過ぎてしまいました」とあるが、このような筆者の心情を表す言葉を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 悪事千里を走る      ロ 一日千秋の思い      ハ 光陰矢のごとし      ニ 時は金なり      ホ 電光石火

問8 2 に当てはまる漢字二字の言葉を考へて答えなさい。

問9 — 線⑨「時間に対する視野が、子供の頃と歳をとつてからでは違う」とあるが、子供と大人の視野にはどのような違いがあるか。次の中から最も適当なものを一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 子供の視野は近く、大人の視野は遠い      ロ 子供の視野は遠く、大人の視野は近い  
ハ 子供の視野は狭く、大人の視野は広い      ニ 子供の視野は広く、大人の視野は狭い  
ホ 子供の視野は暗く、大人の視野は明るい      ヘ 子供の視野は明るく、大人の視野は暗い

問10 3 6 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 3 〓遅く 4 〓速く 5 〓速く 6 〓遅く      ロ 3 〓速く 4 〓遅く 5 〓遅く 6 〓速く  
ハ 3 〓遅く 4 〓遅く 5 〓速く 6 〓速く      ニ 3 〓速く 4 〓速く 5 〓遅く 6 〓遅く  
ホ 3 〓遅く 4 〓速く 5 〓遅く 6 〓速く      ヘ 3 〓速く 4 〓遅く 5 〓速く 6 〓遅く

問11 線⑩「海馬の記憶振り分け回数説は、それをうまく説明します」とあるが、海馬の記憶振り分け回数説で説明できるものとして適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 学校がある日は一日を短く感じるが、日曜日は長く感じる。  
ロ 初めての道を往復する場合、行きよりも帰りの方が短く感じる。  
ハ 子供のときに見たつまらない映画が、大人になって見ると面白い。  
ニ 小さいころはすぐに空腹になるが、歳をとると満腹感が長く続く。

問12 次の中から、本文の内容と合っているものを一つ選んで記号で答えなさい。

イ 歳を取ると運動能力が衰えるために作業時間がよけいにかかり、時間の経過を速く感じてしまう。

- ロ 時間には物理的な時間や実用的な時間など様々なものがあり、私達はその複雑さを楽しんでいる。  
ハ 短時間の時間評価は年代によって差があり、それには脳の海馬のはたらきが大きく関わっている。  
ニ 時間とは様々な要因によって感じ方が変わるものであり、特に心理状態が最も強く影響を及ぼす。

いつごろ、だれがきめたのかわからないが、わが国に「日本三景」というのがある。日本のなかで最も美しいと思われる三つの景勝地をえらんだもので、周知のように宮城県の「松島」、京都府の「天ノ橋立」、そして広島県の「宮島」である。おそらく中国の「瀟湘八景」とか「西湖十景」などに倣って、室町期か江戸時代にだれがいうともなく人の口にのぼるようになったものにちがいない。

それほともかく、この「三景」を思い浮かべてみると、そこに共通した性格があることに気付く。第一に、いずれもが①の景色であるということだ。日本列島にはまるで背骨のように山脈が南から北まで走り、日本を日本海側と太平洋側のふたつに分けている。ほとんどが②といってもいいほどののに、「三景」のなかにひとつも②の風景が入っていない。これはまことに奇妙なことではないか。

第二に、その海岸の景色がみなおだやかな内海に臨むこぢんまりとした浜で、すぐ目の前に小さな島、あるいは洲が見えるといった景観であることだ。逆巻く波が打ち寄せる雄大な海岸線はまったく見捨てられている。「三景」にかぎらない。日本人が名所や歌枕として愛でる風景は、たとえば「須磨・明石」にしる、高知県の「桂浜」にしる、伊勢の「二見ヶ浦」にしる、秋田県の「象潟」にしる、岩手県の「浄土ヶ浜」にしる、そのすべてが③A④B⑤C⑥D⑦E⑧F⑨G⑩H⑪I⑫J⑬K⑭L⑮M⑯N⑰O⑱P⑲Q⑳R㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の曲のながめである。海といっても男性的な荒海ではなく、女性的な優しい入江に日本人は心惹かれるのである。

なぜなのであろうか。おそらく日本民族が体験した太古の記憶が無意識のうちにこのような景色をこのうえなく美しく、懐かしい想いに誘うにちがいない。日本人はその昔、南太平洋の島々、あるいは東南アジア、中国の江南地方、朝鮮半島などからさまざまにコースを経て日本列島にやってきた。原始的な小舟を操ってその航海は、じつにおそろしい体験だったにちがいない。どれほど多くの犠牲者が出たことであろうか。大洋を漂流する彼らが、ただひたすら求めつづけたのは島影だった。③波を避け島に上陸することのできる入江だったはずである。おそらく、そうした太古の記憶が懐かしいイメージとなってあの「日本三景」に結晶しているのではなからうか。

荒海を乗りきってこの列島にたどりついた日本人、そして海に取り巻かれながら生活を重ねてきた日本民族、とうぜん日本人は海洋民族になってしかるべきである。ところが、私たちは海洋民族にはならなかった。④、日本人は二度とふたたびおそろしい海へ乗りだそうとはしなかったからである。むしろ、海洋への冒険を試みた日本人がいないではなかった。⑤、それはきわめてわずかな例にすぎず、ヴァイキングとして海をのし歩いた北歐人や、大航海時代を現出させたスペイン、ポルトガル、イタリアなどの民や七つの海を制覇したイギリス人、さらに海洋貿易に活躍したインド人や中国人などと比べれば日本人はまったく海を相手にしなかったといってもいい。そんなわけで山崎正和氏は日本人を海洋民族ならぬ海岸民族だと評している。まさしくそのとおりだと思う。

⑥、なぜそうだったのか。日本という島があまりに住み心地よかったからではあるまいか。温暖で湿潤な気候、変化に富んだ山河、外敵侵入のおそれのない安全な島国、こんな快適な国土に住みついたので、どうしていまさら海へ出て行くことがある。ここで仲よく暮らせばそれで充分ではないか。あのおそろしい航海体験を、なんであらためて試みる必要がある。海の彼方には、もっとすばらしい未知の土地があるかもしれない。しかし、欲を出せばきりのない話だ。この島で結構。ここで安んじて暮らすにしくはない。こうして日本人は太古の記憶を甘美な思い出として胸に抱きながら、それ以上を望まなかったのである。「日本三景」はこのような日本人の気質を何よりも正直に語っているのだ。

とはいえ、この小さな島に住みついた人たちが何の争いもなく平穏に暮らせたというわけではけつしてない。この島国のなかで、日本人は幾多の戦乱を経験してきた。だが、いくら争ってみても、まわりが海なのであるから逃げ出すわけにはいかない。最終的には何

らかの形で敵と妥協し、共存する道をさぐらねばならなかった。必要なことは「分に安んじる」ことであり、それによって「和」を保つことだった。「分に安んじる」とは、かならずしも「7」に安んじる」ことばかりではない。相手のいい分に安んじることでもあり、つねに一定の限度を守ることでもある。それが何よりも、「和」に必要なのだ。一定の限度を守るということは、それ以上を望まぬということである。おのれを抑制することである。

そんなわけで日本人は、自分をやたらに主張してはいけけない、そして、ものごとをあからさまにすべきではない、と考えるようになった。自分を主張すれば、とうぜん相手の主張とぶつかることになるし、ものごとをはつきりさせれば、いやおうなく相手との食いちがいが出てくるからである。そうなれば争わざるをえなくなる。日本人はそれを何よりもおそれたのだ。

そう。日本人は本質的に争いを好まず、自然の運行のようになすべがうまくいくのを期待し、確信しているきわめて楽観的な、そして同時に悲観的な民族なのである。楽観的であるとともに悲観的、というのは、その楽観が、じつは悲観のうえに成り立っているからである。つまり、この世の中はけっして自分の思っているようにはうまくはいかないものだ、という前提のもとに日本人の判断は構成されているのである。

かつて私は将棋の大山名人にきいたことがある。将棋のタイ局で、しばしば二時間におよぶほどの「長考」がなされることがあるが、いったい、どういう局面でそのような「長考」をするんですか。

すると大山名人は言下に、「あまりにもうまくいきすぎているときです」と答えた。私は「8」をつかれ、思わず、「え、それはまた、どういうわけですか？」とたずねた。

大山名人の返事はこうであった。

「だいたい、ものごととはそんなにうまくいくわけがないからですよ。それなのに妙にうまくいきすぎるといのは、どこかに落とし穴があるからです。それに欺かれないために、うんと考えこむんですね」

私はえらく感心した。さすが一芸に秀でた名人の言葉である。これは将棋にかぎらず人生全般についていえることではないか。と、そう思いつつ、私はこうした確信こそ、まぎれもなく日本的な信ジョウであることに気付いたのだった。

どんな人間もつねに世界にある期待をもつて対している。どれほど世界に期待するか、その期待の大きさで人びとの世界観はちがってくる。実際以上の期待を抱くか、実際に見合った期待を寄せるか、それとも実際以下に期待を抑制するか、それによって理想主義、現実主義、悲観主義が分かれるのである。だが、実際以上に期待すれば、とうぜんその期待は裏切られることが多い。逆に実際以下に期待をおさえれば、期待を裏切られる苦痛からはまぬがれることができる。日本人は後者をえらぶのである。この意味で日本人はきわめて臆病であり、シヨウ心であるといってもよい。日本人は楽観的であるとともに悲観的であり、楽観が悲観の上に成り立っていると私がいったのはこのゆえである。期するところを少なくすれば、苦痛はそれだけ軽減される。すべてにいちおう満足していられたらこれが日本人の基本的な精神の構えである。そして、これを見事にいい当てているのが、ほかならぬ「9」という日本語のあいまいな副詞なのだ。

〔森本哲郎「日本語 表と裏」による〕

問1 1、2 に当てはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ 山 口 湖 ハ 海 辺 ニ 大 海

問2 — 線①「A工B曲」と次の例文のA、Bに共通して当てはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

・ 子どもたちはB口A音に賛成した。 ・ どれも大A小Bで変わりはない。

問3 3、6に当てはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。(同じ記号は二度使えない。)

イ なぜなら      ロ しかし      ハ そして      ニ では

問4 — 線②「山崎正和氏は日本人を海洋民族ならぬ海岸民族だと評している」が、その理由として最も適当なものを、次の中から

一つ選んで記号で答えなさい。

イ 日本人は海に囲まれて生活してきたが、外海への航海を試みたものは少なかったから。

ロ 日本人は海に囲まれて生活してきたが、海洋貿易をしなくても快適に暮らせたから。

ハ 日本人は海に囲まれて生活してきたが、海そのものより海岸の景色を好んだから。

ニ 日本人は海に囲まれて生活してきたが、海とは関係のない生活をしてきたから。

問5 — 線③「安んじて暮らすにしくはない」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 安んじて暮らさなければならぬ。      ロ 安んじて暮らすのが一番良い。

ハ 安んじて暮らせば大丈夫である。      ニ 安んじて暮らすのは簡単だ。

問6 — 線④「太古の記憶」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 原始的な小舟を操って航海をしたという記憶。

ロ 日本の国土で仲良く平和に暮らしたという記憶。

ハ 海の彼方の素晴らしい土地に住んでいたという記憶。

ニ 荒海を乗りきって日本列島にたどりついたという記憶。

問7 7に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 気分      ロ 成分      ハ 身分      ニ 配分

問8 — 線⑤「それ」はどのようなことを指すか。三十字以上四十文字以内で答えなさい。

問9 8 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 弱み      ロ 甘さ<sup>あま</sup>      ハ 本音      ニ 意表      ホ 核<sup>かく</sup>心

問10 —線⑥「裏切られる」、⑦「まぬがれる」の「れる」と同じ働きのものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ このクイズには簡単に答えられる。      ロ 日ごろの勉強の成果があらわれる。  
ハ 隣<sup>りん</sup>国の王には王子が二人おられる。      ニ 点数の高さにわれながら驚<sup>おどろ</sup>かれる。  
ホ 一切れのパンで空腹が満たされる。

問11 —線⑧「後者」は、この文ではどのようなことを指すか。五字以上十字以内で答えなさい。

問12 9 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「せいせい君たちもがんばりなさい」の「せいせい」  
ロ 「どうせやるなら今すぐ始めよう」の「どうせ」  
ハ 「まあまあありがたいと思わなくちゃ」の「まあまあ」  
ニ 「やはり思った通りの結果だった」の「やはり」

問13 —線a「タイ局」、b「信ジョウ」、c「ショウウ心」のカタカナの部分と同じ漢字を書くものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- |   |       |          |   |      |   |      |   |      |
|---|-------|----------|---|------|---|------|---|------|
| a | タイ局   | 〔イタイ軍〕   | ロ | タイ照  | ハ | タイ度  | ニ | タイ列  |
| b | 信ジョウ  | 〔イジョウ景〕  | ロ | 書ジョウ | ハ | 通ジョウ | ニ | ジョウ令 |
| c | ショウウ心 | 〔イ印ジョウ心〕 | ロ | 希ジョウ | ハ | 縮ジョウ | ニ | 負ジョウ |

二

次の文章は、古代中国の思想家孔子と、その弟子である子路・顔淵の話し合いの場面である。これを読んで、後の1〜7の問いに答えなさい。

「どうじゃ、今日はひとつ、めいめいの理想といったようなものを話しあってみたら」

この孔子の言葉を聞くと、子路は目を輝かし、からだを乗り出して、すぐに **1** をきろうとした。孔子はそれに気がついたが、わざと目をそらして、顔淵の方を見た。

顔淵は、ただしずかに目を閉じていた。彼は、自分の心の奥底に、なにかを探り求めているかのようにであった。

子路は、自分にものをいう機会を与えなかった孔子の心を解しかねた。そして、いささか不平らしく、

「先生！」

と呼びかけた。で、孔子も仕方なしに、また子路の方をふり向いた。

「先生、私は、私が政治の要職につき、馬車に乗ったり、毛皮の着物を着たりする身分になっても、友人とともにそれに乗り、友人とともにそれを着て、たとい友人がそれらをいためても、うらむことのないようにありたいものだと思ひます」

孔子は、子路が物欲に超越したようなことをいいながら、その前提に自分の出／立／世／身を置き、友人を自分以下に見ている気持ちに、ひどく不満を感じた。そして、促すように、ふたたび顔淵の顔を見た。

顔淵は、いつものような謙遜な態度で、子路のいうことに **2** を傾けていたが、もう一度、自分の心を探るかのように目を閉じてから、しずかに口を開いた。

「私は、善に誇らず、労を衒わず（自分の苦労や努力を誇らしげに見せびらかすことなく）、自分の為すべきことを、ただただ真心を

こめてやってみたいと思うだけです」

孔子は、軽くうなずきながら顔淵の言葉を聞いていた。そして、それが子路にどう響いたかを見るために、もう一度子路を顧みた。

子路は、顔淵の言葉に、なにかしら深いところがあるように思った。そして自分の述べた理想は、それに比べると上すべりのしたものであることに気がついて、いささか恥ずかしくなった。が、悲しいことには、彼の自負心が、同時に首をもたげた。そして、彼はそっと顔淵の顔をのぞいて見た。顔淵は、しかし、いつもと同じように、つましくすわっているだけで、子路が述べた理想を嘲っているようなふうなど、微塵もなかった。子路はそれでひとまずほっとした。

けれども、子路としては、孔子がどう思っているかが、もっと心配であった。そして、一種の気味悪さを感じながら、孔子の言葉を待った。孔子は、しかし、じっと彼の顔を見つめているだけで、なんともいわなかった。

かなり長い間、沈黙がつづいた。子路にとっては、それは息づまるような時間であった。彼は目を落として、孔子の膝のあたりを見たが、やはり孔子の視線が自分の額のあたりに落ちているのを感じないわけにはいかなかった。彼は少しいらいらしてきた。そして、顔淵までがおし黙って、つましく控えているのが、いっそう彼の神経を刺激した。彼は顔淵に対して、これまでにない腹立たしさを感じたのである。で、とうとう彼はたえきれなくなって、詰めるように孔子にいった。

「先生、どうか先生のご理想も承らせていただきたいとゾンじます」

孔子は、子路が顔淵に対してすらも、その浅はかな自負心を捨てきれないのを見て、暗然となった。そして、深い憐憫の目を子路に投げかけながら、答えた。

「わしかい、わしは、老人たちの心を安らかにしたい、朋友とは信をもつて交わりたい、年少者には親しまれたいと、ただそれだけを願っているのじゃ」

この言葉を聞いて、子路は、そのあまりに平凡へいほんなのに、きよとんとした。そして、それに比べると、3、と思った。

彼のいらいらした気分は、それですっかり消えてしまった。

これに反して、顔淵のしずかであった顔は、うすく紅潮してきた。彼は、これまで幾度いくども、今度こそは孔子の境地に追いつくことができたぞ、と思った瞬間しゅんかんに、いつも、するりと身をかかわされるような気がしたが、この時もまたそうであった。彼は、自分が依然いぜんとして自分というものにとらわれていることに気がついた。

先生は、ただ老者と、朋友と、年少者のことだけを考えていられる。それらを基準にして、自分を規制していこうとされるのが先生の道だ。自分の善を誇らないとか、自分の労を銜はわれないとかいうことは、要するに自分を中心にした考え方だ。しかもそれは頭でひねりまわした理屈りくつではないか。自分たちの周囲には、いつも老者と、朋友と、年少者がいる。人間は、この現実に対して、ただなすべきことをなしていけばいいのだ。自分にとらわれないところに、誇るも銜はうもない。彼はそう思っ、孔子の前に首をたれた。

孔子は、自分の言葉が、自分の予期以上に顔淵の心に響いたのを見て取って、いい知れぬ悦よろこびを感じた。けれども、かんじんの子路が、なんの得るところもなく、相変わらず4に災わざいされているのを見ては、ますます心を暗くせずにはおれなかった。

〔下村湖人「論語物語」による〕

問1 1、2 に体の一部を表す漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

問2 — 線①「出／立／世／身」の漢字を並べかえて、意味の通る言葉に直しなさい。

問3 — 線②「彼は少しいらいらしてきた」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 話し合うことを求めたにもかかわらず、弟子だけに発言させて自分の考えを何も言わない孔子にひどく腹が立ったから。
- ロ 自分の考えよりも優れた理想を述べた顔淵が、いかにも得意気な顔ですまして座っていることが気に入らなかったから。
- ハ うっかり教えに反した発言をしてしかられると思ったのに、孔子が何も言わなかったのでかえって気味が悪かったから。
- ニ 顔を見つめるだけで何も言わないので、自分が述べた理想について孔子がどう思っているのかわからず不安だったから。
- ホ 顔淵の理想を聞いて自分の誤りに気づいたが、それを言い直すためのうまい言葉が見つからずにあせってしまったから。

問4 — 線③「承らせていただきたいとゾンじます」について次の問いに答えなさい。

- (1) 「承らせて」の読み方をひらがなで答えなさい。
- (2) 「ゾンじます」のカタカナを漢字に直しなさい。
- (3) 「承らせていただきたいとゾンじます」を例にならって、敬語をふくまないように十二字で書きかえなさい。

例) 「召めし上がってはくださるのでしょうか」↓「食べてはくれるのだろうか」

問5

3

に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 自分はいささか難しく考えすぎていたな
- ロ 自分のいったこともまんざらではないぞ
- ハ 自分の何が気に召さなかつたのだろう
- ニ 自分や顔淵が評価されてしかるべきだ

問6

4

に当てはまる七字の言葉を、文章中からぬき出して答えなさい。

問7

この文章全体から読み取れる、孔子の子路に対する気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 子路にはそれほどの短所が無いと認めはするものの、常に自分と他者とを比較する傾向が捨てきれないことを深く嘆いている。
- ロ 子路にかしこさを認める一方で、その成長をさまたげている気の短さはもはや改めようが無いと嘆き、将来を不安視している。
- ハ 子路に大きな欠点があることを嘆きながら、決して見捨てることなく、何とかしてその反省と進歩を促そうと心をくだいている。
- ニ 子路にかけてきた期待が裏切られたことを嘆き、厳しくとがめるのが師としての務めと思いながら、その気持ちすら失っている。